

▶敗戦後5年目に発行された『ザメンホフ』

エスペランティスト伊東三郎については、由比忠之進の友人として、また本誌で何度か岩波新書『エスペラントの父 ザメンホフ』の著者であることを記したことがあります。これから何回か伊東三郎について書いてみたいと思います。

今、私の手元に伊東の著書『ザメンホフ』があります。奥付を見ますと、1950年4月10日第1刷発行、そして1997年11月19日第9刷発行と記されています。何回かの引っ越しや自宅の改築などで所蔵していた本も、残念ながらその多くは古本屋へ行ってしまい、この『ザメンホフ』も二回ぐらいは新たに買い求めたのではないのでしょうか。

初版が1950年、日本の敗戦後5年目の年です。焼け跡闇市時代の残り火がまだ色濃くあった時代、人々は活字に飢え、知識人と言われる人々だけでなく、多くの人々がむさぼるように本や雑誌に飛びついていた時代です。

▶戦前、何度も獄中に入った伊東

1902(明治35)年生まれの伊東は当時48歳。いわば男盛りの時でした。軍国主義日本の時代に辛酸を舐めた伊東は、「民主日本」の登場に小躍りし、思う存分活躍できる時代をことのほか喜んだことでしょう。

著書『ザメンホフ』の〈あとがき〉の冒頭を伊東はこう書いています。

「本當のザメンホフ傳を書けと求められて、年月がたちました。戦後の若い世代はその名前さえも忘れており、長年のエスペランティストは偶像にしてしまいこんでいます。しかし、ザメンホフの生涯こそは今日のわれわれにとって深い教えに富むと思います。わたしはザメンホフの『傳』(vivo)を通して知識のみではなく、その人の「生命」(vivo)を伝えねばならないのです。本當の『傳』は、

くわしく調べ、たくみに描き出し、または、ただこの上なくほめかざることはちがいます。求められている他人ごとでないvivo傳はわきからの見物人やただの研究者ではむずかしいし、ただの信者や弟子にはなおさらできないことでしょう。

むかしからよく、師の道をあゆみ、ふみこえなければ師の生命を伝えることができないといわれます。わたしがその本當のvivoを伝え得るものとはいえません。それは多くの力の共同によらなければなりません。かれの生命は共同にあるのだから……。わたしはただ力及ばずとも力をつくすのみです」

▶ひとりではなく「共同の力」で

この〈まえがき〉の最初の文章からも伊東の性格がよく出ています。決して自己を過大に表出することなく、「多くの力の共同によらなければなりません」と記したように、自分だけでなく、多くの人たちの共同の力が本書を生み出したのだと彼は書いているのです。事実、先に紹介した〈まえがき〉の次の段落で「このザメンホフ傳は多くの人々の協力と助けによってでき上がりました」と記しています。

伊東は岡山市に磯崎高三郎、^{まゑがき}長枝の長男として生まれました。幼少の頃より外国への関心が強く、叔父・^{あきら}磯崎融と古美術商のエスペランティスト瀬崎達太郎の会話からエスペラントのことを聞き、

いたく興味をそそられ、岡山中学に入学するやエスペラントに熱中しました。

1921年、19歳の時、青山学院職業科に入学し、「1年上の松本正雄と青山学院エスペラント会の発展をはかり、SAT(全世界無国民協会)の会員になる」と年賦(『伊東三郎 高くたかく遠くの方へ 伊東三郎遺稿と追憶』(渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎編 土筆社刊)に記されています。

第十八回 清貧な理想主義者 伊東三郎

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)

この著作は1969年の伊東の死から5年後の1974年、伊東の遺稿や書簡、友人知人たちの伊藤を追憶する文章などをまとめた600頁の大著です。

またSATは正式には、Sen-naci-ec-a Asocio Tut-mondaと言います。1921年、ランティという人がつくりました。国民という概念を否定して人々は人類の一員なのだという考えの下に結成された世界的な組織であり、SATがまず主張するのは、「独立した単位と考えられているすべての国家と国民をなくす」というものです。ちなみに私は、大してエスペラントを話せない語学レベルでは初心者に過ぎませんが、SATの会員です。日本でSATの会員は本当に少数で100人にも満たないようですが私は、SATをザメンホフの思想を体現した組織だと思い参加したのです。SATについてはいずれまた詳しくお話しすることがあるでしょう。

➤二つの学校を中退し農民運動へ

伊東は青山学院を早々に中退し、大阪外国語学校(大阪外大)仏語科に入学しますが、そこも中退して、故郷の岡山へ帰りました。一説には、大阪市電大争議で学生がスト破りに雇われることに反対し、「学聯」の名において闘争して大阪外国語学校から追放されたとも言われていますが真偽は不明です。

23歳になって大阪市立盲学校の講師となり、英語とエスペラントを教え、また大正日日新聞社主催のエスペラント講習会では、大本(教)本部の伊藤栄蔵とともに講師を務めました。

大本教では、出口なお、その娘婿である出口王仁三郎という二人の教祖、詳しく言えば大本信徒たちは、なおを開祖、王仁三郎を聖師として親しく呼び師事しています。その聖師・王仁三郎は強くエスペラントを支持し、今なお大本信徒にはエスペラントを学習する人たちが少なからずいます。

さて伊東は、翌1926年、労働農民党に入党、大阪府連書記長代理になりました。労農党は日本共産党の指導の下、日本農民組合、日本プロレタリア

芸術連盟などが統一して日本の山東出兵に反対した時、対支非干渉同盟を組織しました。この間、伊東はたびたび逮捕され、盲学校の教え子から差し入れを受けていたこともあったようです。

➤埴谷雄高と出会う

1930年、28歳の頃、伊東は日本共産党に入党したとされています。主に農民運動の指導に当たり、般若豊(本名)と知り合うようになります。1960年代、多くの左翼青年に影響を与えた、後の埴谷雄高(筆名)です。埴谷は『死霊』という哲学的な小説、そして多くの政治評論を書き続け、1960年代の学生運動、とりわけ日本共産党と一線を画す左翼青年や文学青年らに教祖的存在として崇められるような存在になりました。私も埴谷の著作を読んだ一人で、とりわけ『幻視の中の政治』には大きな影響を受けましたが、伊東の口から埴谷の名前を聞いたことがありませんでした。しかし、清貧暮らしをしていた伊東を陰ながら支援していたようです。

伊東は何度も逮捕され拘留所暮らしをしました。日本共産党の敗戦後、友人たちの勧めもあり、『ザメンホフ』を刊行し、その後もエスペラントをいろいろな所で教え著作活動もしましたが、とりわけ世間的に有名であったわけではありません。しかし小さなエスペラント界では著名な人物でしたが、1969年に亡くなりました。前出の『遺稿と追憶集』から、1969年そして1970年の項をそのまま紹介してみましよう。

「1969年67歳1月、健康を害して病臥中、身近に東大闘争起こり、事態の重大さを深刻に考える。2月28日発病、永川下セツルメント病院に入院、3月7日午後10時20分死去。9日、本郷の自宅にて葬送。5月、熊本県鹿本郡内田村の宮崎家の墓地に埋葬。

1970年 3月18日、第23回解放運動犠牲者追悼会で、青山の無名戦士の墓に合葬」

と記され、年譜はそこで終わっています。